

無化学農薬栽培茶園の二番茶におけるチャノミドリヒメヨコバイ被害の品種間差					
[要約] 無化学農薬栽培の二番茶において、「ゆたかみどり、さやまかおり、さきみどり、めいりよく、さやまみどり、おくゆたか」はチャノミドリヒメヨコバイによる被害が少ない。					
佐賀県茶業試験場 茶樹研究担当		連絡先	TEL:0954-42-0066 E-mail:chagyoushiken@pref.saga.lg.jp		
部会名	茶業専門部会	専門	病害虫	対象	茶

[背景・ねらい]

近年、安全・安心な農産物に対する消費者ニーズが高まる中で、エコファーマー等の減・無化学農薬栽培への取り組みが徐々に増加しつつある。一方、これらの栽培法では、特に二番茶生育期に新芽加害性害虫による被害を受けやすい。そこで、28品種を供試して、無化学農薬栽培条件下における害虫被害を調査し、今後の品種選定に活用する。

[成果の内容・特徴]

1. 無化学農薬栽培の二番茶では、品種間で害虫被害（合計被害芽率）に差がみられ、チャノミドリヒメヨコバイによる被害が最も大きい品種が多い（図1）。
2. 供試品種の中でチャノミドリヒメヨコバイによる新芽の被害度が「やぶきた」よりも小さい品種は、早生種では「ゆたかみどり、さやまかおり、さきみどり」、中生種では「めいりよく」、晩生種では「さやまみどり、おくゆたか」である（図2）。
3. 供試品種の中でチャノミドリヒメヨコバイによる新芽の被害度が大きい品種は、早生種では「くりたわせ、さえみどり、するがわせ」、中晩種では「しゅんめい、みなみかおり」、晩生種では「さみどり、はるみどり」である（図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 減農薬および無農薬栽培を行う場合ならびに一般栽培において品種選定の参考となる。
2. 供試茶園は2008年から有機JAS栽培に準拠した無化学農薬栽培区を設けた。施肥は菜種油粕を主体に年間施肥量をN-P-K=50-27-14kg/10aとし、2011年秋肥からは有機率100%とした。
3. 調査区は、二番茶の開葉初期に除虫菊乳剤30×1,000倍を散布した（有機JAS認証栽培で緊急時の使用が認められている）。また、2011年、2012年共に前年は二番茶摘採後に浅刈り更新を行った。

[具体的なデータ]

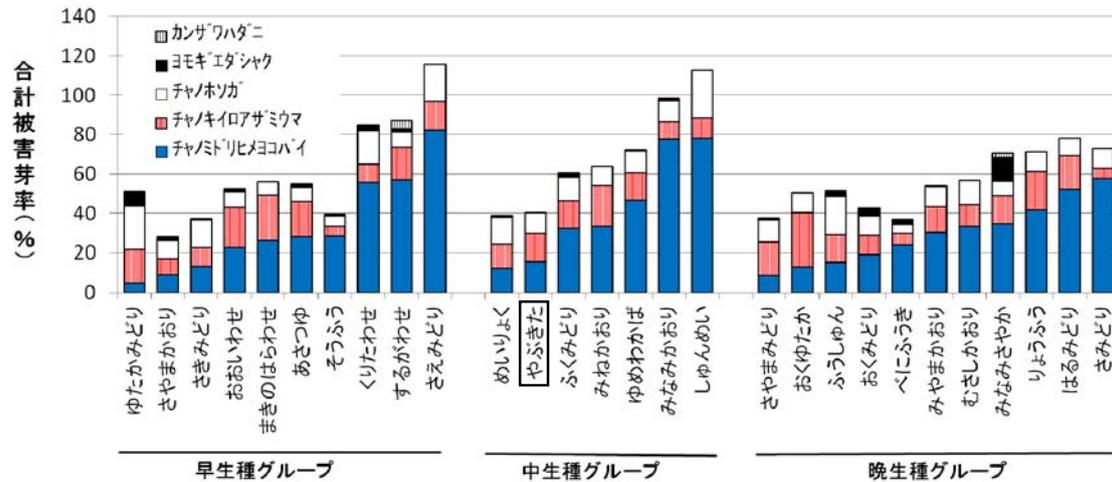


図1 無化学農薬栽培園における二番茶芽の害虫被害(2011、2012年平均)

注1) 二番茶摘採時に20cm×20cm 枠×2 反復で摘芽調査を行い、被害を確認したチャノミドリヒメコバエ、チャノキイロアザミウマ、チャノホリガ、ヨモキエダシヤク、カサワハダニについて被害芽率を算出した。

$$(\text{被害芽率} \%) = (\text{被害芽数}) \div (\text{全芽数}) \times 100$$

注2) 品種は早生種・中生種・晩生種にグループ分けし、それぞれのグループ内でチャノミドリヒメコバエによる被害芽率が小さい旬に左側から並べた。

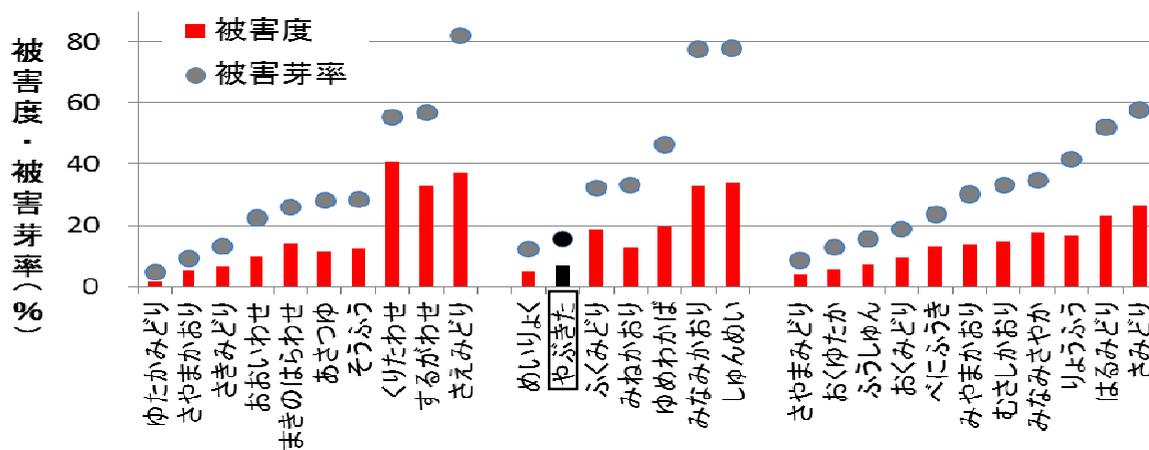


図2 無化学農薬栽培園における二番茶芽のチャノミドリヒメコバエ被害(2011、2012年平均)

注1) 調査方法、品種の並べ方は図1に同じ。被害芽率 = (被害芽数) ÷ (全芽数) × 100

注2) 被害度 = (指数1芽数×1 + 指数2芽数×2 + 指数3芽数×3) ÷ (調査芽数×3) × 100

<被害指数> 0: 被害無し、1: 葉脈が褐変、2: 葉脈が黄化萎縮、3: 葉の萎縮・赤枯れ有り

[その他]

研究課題名: 茶園における有機栽培技術の系統化

予算区分: 県単

研究期間: 2008~2014年

研究担当者名: 野中一弥・中村典義・徳重憲治・釘本和仁